

千島列島南部のスイセン逸出

V. Yu. バルカロフ¹・Yu. N. スンドウコフ¹・三宅幹雄²・福田知子³・高橋英樹⁴

¹ ウラジオストク生物学土壌学研究所 (690022 ウラジオストク100周年記念通り159,
ウラジオストク市)

² 日本水仙協会会員 (〒712-8001 倉敷市連島町西之浦3895)

³ 三重大学教養教育院 (〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577)

⁴ 北海道大学総合博物館 (〒060-0810 北海道札幌市北区北10条西8丁目)

Vyacheslav Yu. BARKALOV, Yuri N. SUNDUKOV, Mikio MIYAKE, Tomoko FUKUDA (fukuda@ars.mie-u.ac.jp)
and Hideki TAKAHASHI: Naturalization of cultivated *Narcissus* to the southern Kuril Islands

要旨

国後島、色丹島、水晶島（齒舞諸島）で撮影されたスイセンの園芸品種を同定した。4つの分類群のうちラッパスイセン *Narcissus pseudonarcissus* の八重花品種 *Telamonius Plenus* ('Van Sion') とクチベニスイセン *Narcissus poeticus* var. *recurvus* の2つは日本に渡来した記録があったが、3番目の *Feu de Joie* という古典的品種に似た品種は、日本に渡来した記録が見つからなかった。4番目はロシアで広く栽培される *Conspicuous* ('*Barrii Conspicuous*') という品種のようである。写真を見ると、最初の2品種は日本時代の旧居住跡地周辺とみられる場所に群生しているので、日本側から持ち込まれた栽培個体が残存・逸出したと考えられる。これに対し、3番目の品種はササ原の中に単生しており、4番目の品種の生育地も旧日本人居住区から離れていることから、戦後、ロシア側から移入した可能性がある。

スイセン属 (*Narcissus* L., 1753) はヒガンバナ科 (Amaryllidaceae) 植物で、ヨーロッパ中一西部、アフリカ北部、西アジアに分布する (佐竹 1982, Artyushenko 1982, 米倉 2013)。原産地の分布地では、水流のある谷間の草地や高山草原など、湿潤な生育条件に生育する (Artyushenko 1982)。野生状態の原種に加えて多くの栽培品種が知られており、観賞用植物として、ヨーロッパから東アジア、北米まで、北半球の各国で広く栽培されている。日本では、主にスイセン、ラッパスイセンが広く知られ、時に逸出したものが野生環境下にみられる (佐竹1982, Science Museum Net: <http://science-net.kahaku.go.jp/>)。

2012-2017年、国後、色丹、水晶島、勇留島において、著者の一人であるスンドウコフが同定しやすい時期である開花期にスイセンを観察・撮影した。その観察結果と写真は、やはり著者の一人であるバルカロフ宛に送付された。これらのスイセンは第二次大戦までこの島々に居住していた日本人住民が栽培していた品種が残存・逸出したものと考えられたため、写真は同定のため日本に送付された。

日本水仙協会のメンバーが同定を行ったところ、写真の植物は4つの分類群 (図1: A・B,

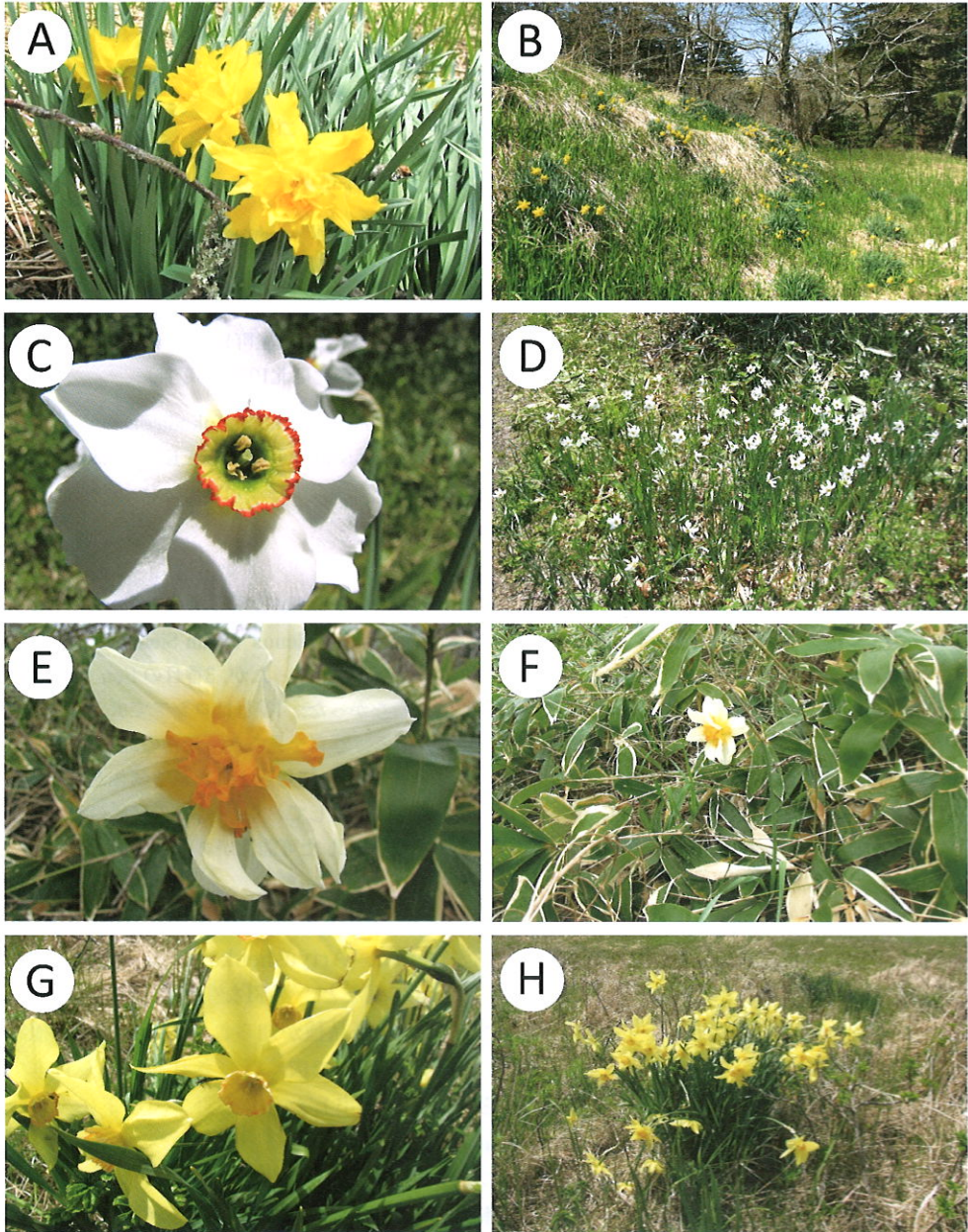


図1. A・B: *Telamonius Plenus* 'Van Sion'. A: 花, B: 生育状況. 2012年5月15日, 色丹島松ヶ浜の小川で撮影. C・D: *Narcissus poeticus* var. *recurvus*. C: 花, D: 生育状況. 2013年6月11日, 国後島ハッチャス埼で撮影. E・F: *Feu de Joie*. E: 花, F: 生育状況. 2013年6月1日, 国後島ハッチャス埼で撮影. G・H: *Conspicuous* ('*Barrii Conspicuous*'). G: 花, H: 生育状況. 2017年6月7日, 水晶島 Zorkaya 湾で撮影.

C・D, E・F および G・H) にまとめられた。同定は、花の構造（一重／八重）、花被片・副花冠の色、雄蕊の形などを、米国水仙協会（American Daffodil Society）が作成したデータベース DaffSeek-Daffodil Database with Photos. <https://daffseek.org/>, 日本水仙協会のスイセンひろば <http://daffodil.jp/> に掲載されたスイセンと比較した。また、それらの品種の特徴や、日本への導入時期などについても調査をおこなった。

同定結果は以下の通りである。

A・B はラッパスイセン *Narcissus pseudonarcissus* (1Y-Y) の八重化した品種である *Telamonius Plenus* の可能性が高く、この品種は明治時代（1868-1912）にバンシオン 'Van Sion' という名前前で日本に渡来している。1620年以前からある品種で、種子・花粉ともに稔性がある。

C・D は雄蕊の形状などの特徴から、クチベニスイセン *Narcissus poeticus* var. *recurvus* と同定された。この品種はスイスアルプスなどに自生する原種で、明治時代に日本に園芸用に導入された記録がある。花被片が白色で、雄蕊の3本のみが発達し、残りの3本が退化するという特徴がある。種子・花粉ともに稔性がある。

E・F は Feu de Joie という、花被片と副花冠が2重になった八重花品種である。副花冠の色合いが独特である。古典的品種であるが、日本に渡来した記録が見当たらない。1927年以前に登録され、種子に稔性があると考えられている。

G・H は Conspicuous ('Barrii Conspicuous') という品種で、花被片と副花冠は黄色で、副花冠の先端のみが赤～オレンジ色となる品種である。現在でもイギリスなどヨーロッパで販売され、ロシアにも出回っているが、日本に導入された記録はない。1869年以前に登録され、種子に稔性があると考えられている。

なお、園芸種としてのスイセンは、大きく13部門 (division) に分けられ、1～12部門に含まれる植物は園芸品種名のみを持ち、第13部門のみに、学名を持つ「原種」と呼ばれるスイセンが含まれる (DaffSeek-Daffodil Database with Photos: <https://daffseek.org/>, 日本水仙協会スイセンひろば <http://daffodil.jp/>)。この分類に従うと、これらの植物はそれぞれ、以下のように表せる。

A・B: 4Y-Y (第4部門＝八重咲スイセン部門、最初の Y は花被片の色 (Yellow)、次の Y は副花冠の色 (Yellow))。

C・D: 原種 (第13部門、種、野生変種) (Species, Wild Variants)。

E・F: 4W-O (第4部門＝八重咲スイセン部門、最初の W は花被片の色 (White)、次の O は副花冠の色 (Orange))。

G・H: 3Y-YYR (第3部門＝小杯部門、最初の Y は花被片の色 (Yellow)、次の YYR は副花冠の色 (基部: Yellow, 中央部: Yellow, Red))。

クチベニスイセンやラッパスイセンはこれらの島々 (色丹島, 国後島, 歯舞・勇留島) から既に報告があるため (Barkalov 2009, 高橋2015), *Telamonius Plenus*, Feu de Joie, Conspicuous が新たに植物相リストに追加された。各種の分布状況は、以下のようである (図2)。

Telamonius Plenus ('Van Sion') という品種は南千島に生育するスイセンの中で最も多くみられ、早期に開花する品種である。開花時期はその年の気象条件によって異なるが、通常5月中旬に開花が始まり、5月下旬に大量に開花、6月初旬に開花が終了する。海岸および河岸段丘の多種の草本からなる開けた草原、林内の草地、道ばたにみられるが、ササの茂み

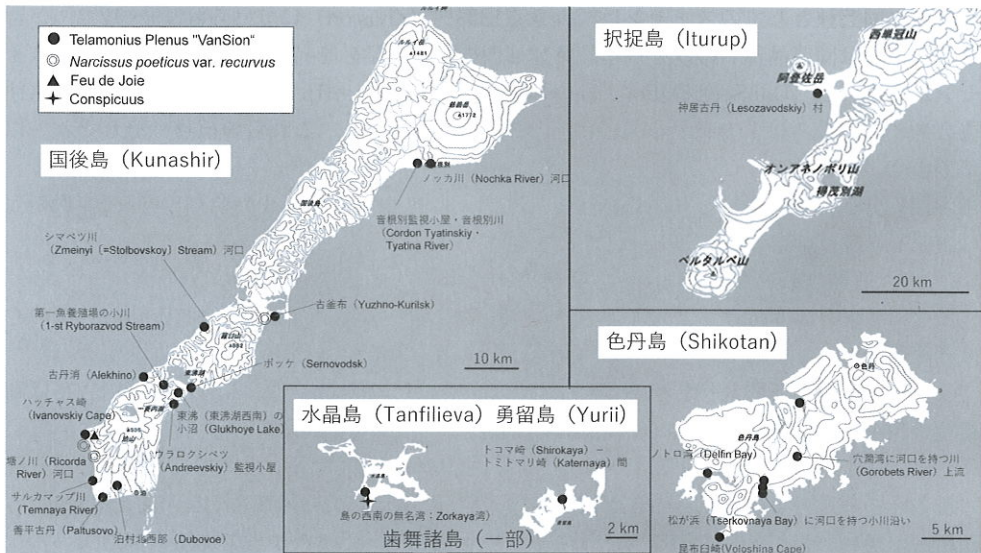
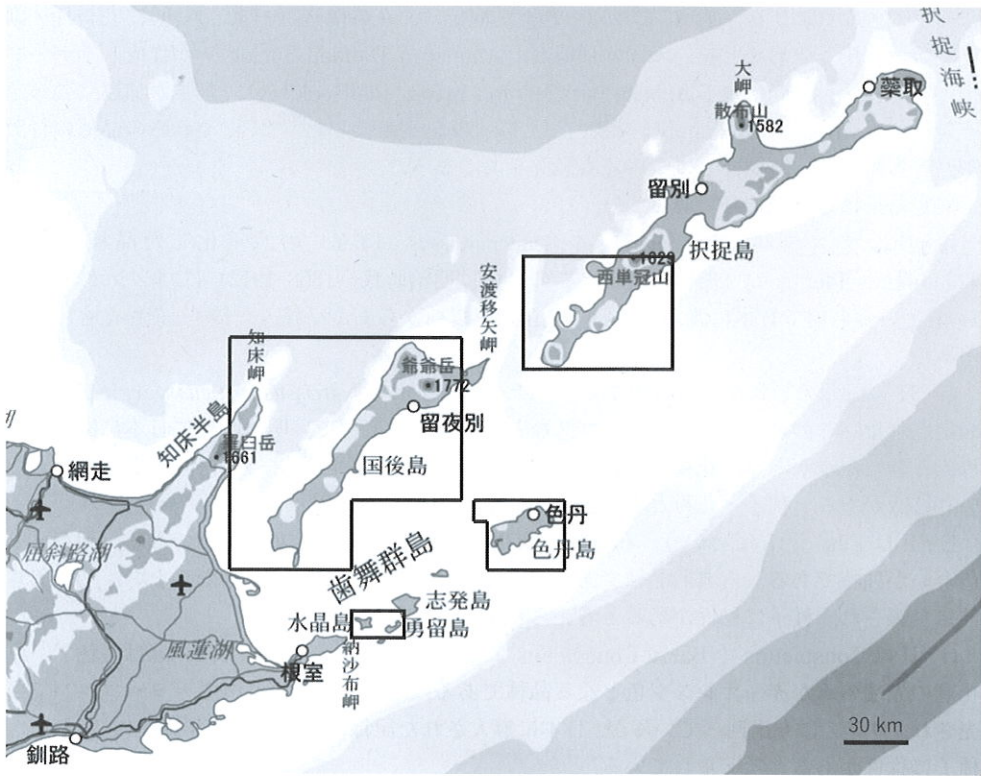


図2. 各スイセンの分布地点の地図. 黒丸 (●) : *Telamonius Plenus* 'Van Sion' (図1 : A, B), 二重丸 (◎) : *Narcissus poeticus* var. *recurvus* (図1 : C, D), 黒三角 (▲) : Feu de Joie (図1 : E, F), 星印 (+) : Conspicuous (図1 : G, H). 色丹島の *Telamonius Plenus* 'Van Sion' の分布は全島にみられ, ●は分布の例. 勇留島の, トコマ崎 (Shirokaya) - トミトマリ崎 (Katernaya) 間の●は凡その地点. 勇留島には *Narcissus poeticus* var. *recurvus* (◎) もあるが, 地点不明.

には生えず、旧～現居住地の周辺により頻繁にみられる。通常、群生する。国後島の多くの場所：ハッチャス崎 (Cape Ivanovskiy), サルカマップ川 (Temnaya River) 河口, 古丹消 (Alekhino), 古釜布 (Yuzhno-Kurilsk), ボッケ (Sernovodsk), 泊村北西部 (Dubovoe), 善平古丹 (Paltusovo), ウラロクシベツ (Andreevskiy) 監視小屋, シマベツ川 (Zmeinyi [=Stolbovskoy] Stream) 河口, ウラロクシベツ川 (Andreevka River) 下流, 東沸湖西端・第一魚養殖場の小川 (1-st Ryborazvod Stream), 東沸湖 (Peschanoye Lake) の西岸, 東沸 (東沸湖西南) の小沼 (Glukhoye Lake), 東沸川 (Sernovodka River) 河口, 音根別監視小屋 (cordon Tyatinskiy), 音根別川 (Tyatina River) 河口, ノッカ川 (Nochka River) 河口や, 色丹島のほぼ全域, 例として, 松が浜 (Tserkovnaya Bay) に河口を持つ小川沿いの全域, 穴澗湾に河口を持つ川 (Gorobets River) 上流, 能登呂湾 (Delfin Bay), 昆布臼崎 (Cape Voloshina), 穴澗 (Krabozavodskoye) 近郊, 水晶島にも, 島の西南の税庫前の無名湾: Zorkaya 湾), 勇留島にも, トコマ崎 (Shirokaya) - トミトマリ崎 (Katernaya) 間の標高21.3mの箇所にもみられる。

色丹島には, Telamonius Plenus ('Van Sion') のみがみられ, 沿岸から峠まで, 川・溪谷や河岸段丘の全島にほぼ全体に分布する。島にはかなり逸出し, 自然植生にも侵入している (Fig. 1. B)。この品種は北海道や本州北部 (東北) の山々にも生育する。標本 (VLA) によると, おそらく, 択捉島の神居古丹 (Lesozavodskiy) 村の周辺にも分布する。八重化した品種は種子の再生能力の低下がみられる (日本水仙協会よりの私信) ということなので, この種が広く自然逸出していることを考慮すると, この品種は主に根茎によって増殖していると考えられる。

クチベニスイセン *Narcissus poeticus* var. *recurvus* は国後島では稀な種で, ハッチャス崎 (Ivanovskiy) 保護区監視小屋と, 塘ノ川 (Ricorda River) 河口の2箇所で見られたのみである。これは最も遅咲きのスイセンで, ハッチャス崎 (Cape Ivanovskiy) では開花は6月2日, 開花終了は2013年6月16日だった (ラップスイセンは6月1日には完全に花期終了)。泊村 (Golovnino) の東側の塘ノ川 (Ricorda River) 沿いでは5月27日に開花した (この年は2012-2018年で最も温暖な年で, ラップスイセンはこの時期にはすでに開花終了していた)。ハッチャス崎 (Cape Ivanovskiy) では, このスイセンは保護区監視小屋周辺の草丈の低い草地や小道に長い列をなして生え, 個体ごとに個々に生えているものも多かった。塘ノ川 (Ricorda River) 河口付近には, 沼周辺の高くなった場所にいくつかが開花した小さい群落のみみられるだけであった。この2箇所以外に, ロシア科学アカデミー極東支部東アジア陸上生物多様性センター (VLA) やクリルスキー自然保護区に保管された標本によると, クチベニスイセンは国後島の古釜布周辺や勇留島にもみられる。

Feu de Joie という名前の品種のスイセンは, 千島では稀なようである。国後島の南西部のハッチャス崎 (Cape Ivanovskiy) にあるハッチャス崎 (Ivanovskiy) 保護区監視小屋の1箇所のみで見ついている。個体ごとに分かれて生えた10本ほどの開花個体の群落が保護区施設近くの広葉樹林内のササの茂みにみられた。開花期は2013年5月27日から6月4日であった。Conspicuous ('Barrii Conspicuous') という品種のスイセンは水晶島の無名湾 (島の西南: Zorkaya 湾, 図2参照) によくみられる品種で, 海岸の多種の草本からなる草原に比較的大きな群落で生えている。同じ場所のラップスイセンがほぼ開花を終了した時期である2017年6月7日に満開になっているのが観察された。

写真を見る限りでは、A・Bの *Telamonius Plenus* ('Van Sion') やC・Dのクチベニスイセンは、日本人の旧居住地と思われる斜面・平地にみられ、日本時代に導入されたと考えられる。これらの植物がこの地域に圧倒的に多く残っているのは印象的である(図2)。一方、E・Fは、ササ原の中に単独でみられた。このような生育環境や、E・Fの推定品種 *Feu de Joie* が日本に輸入された品種リストに掲載されていないことから、E・Fは第二次大戦終戦前の旧日本人居住区周辺で残存・逸出したのではなく、大戦後、ロシア人の移入に伴って千島に侵入した可能性がある。G・Hの推定品種 *Conspicuus* も日本には導入された記録がないことから、この品種もロシア人の千島への移住に伴い導入されたとみられる。これらのスイセンはいずれも球根により増殖可能であることから、今後も栽培逸出個体への管理が必要と思われる。同様な例として、園芸種のオオハンゴンソウ (*Rudbeckia laciniata* L.) が挙げられる。オオハンゴンソウも国後島太平洋岸の高茎草原に侵入して、地域の植物を衰退に追いやっている (Fukuda *et al.* 2014)。

引用文献

- Artyushenko, Z. T. 1982. Amaryllidaceae. In Takhtadjan A. L. (ed.): Life of plants. V. 6. Flowering plants, pp. 104-115. Prosveshchenie, Moscow (in Russian).
- Barkalov, V. Yu. 2009. Flora of the Kuril Islands. Dalnauka, Vladivostok. 468p (in Russian, translation at: http://reevesiana.web.fc2.com/chishima_index.html).
- DaffSeek, American Daffodil Society, Inc., www.daffseek.org (2018年2月9日参照).
- Fukuda, T., A. A. Taran, H. Sato, Y. Kato and H. Takahashi. 2014. Alien plants collected or confirmed on the Islands of Shikotan, Kunashir and Iturup on the 2009-2012 botanical expeditions. In Takahashi, H., T. Fukuda and Y. Kato (eds.): Biodiversity and Biogeography of the Kuril Islands and Sakhalin vol. 4, pp. 8-26. The Hokkaido University Museum, Sapporo.
- 日本水仙協会. スイセンひろば. <http://daffodil.jp/> (2018年9月17日参照).
- 佐竹義輔. 1982. ヒガンバナ科 Amaryllidaceae. 佐竹義輔, 大井次三郎, 北村四郎, 亘理俊次, 富成忠夫 (編) 日本の野生植物 草本 I. pp. 53-54. 平凡社, 東京.
- Science Museum Net (S-Net). <http://science-net.kahaku.go.jp/> (2018年9月17日参照).
- 高橋英樹. 2015. 千島列島の植物. 北海道大学出版会, 札幌. 509p.
- 米倉浩司. 2013. 維管束植物分類表. 北隆館, 東京. 213p.

(受付日2018年12月21日, 受理日2019年2月12日)